本《子ども》文化＋風俗

ビランジ

CONTENTS

MEMORY

ヤンコミ編集格闘記 ……5 筧 悟

〈連載〉児童雑誌編集者として・思いだすことども ④ ……20 丸山 昭

楽屋裏だって楽じゃない（二）

〈連載〉聞き書き「街頭紙芝居」③

親子二代にわたる紙芝居一家 ―森下正雄さんに聞く ……35 畑中圭一

EXAMINATION

〈連載〉戦後劇場アニメ公開史 ⑧

長編アニメ「ダンボ」「こぐま物語」の公開 ……47 渡辺 泰

〈連載〉変容するマンガたち ①

「スピード太郎」、描き変えのあと ……72 竹内オサム

OBSERVATION

〈小特集・マンガの批評研究誌〉

マンガの批評研究誌もくじ一覧 ……92 編集部

漫画評論をとりまく時代のうねりの中で ……127 橋本 博

〈連載〉データで読む「少年画報」史 ②

漫画にとっては日本一に、夢は大きな少年雑誌 ……144 F・M・ロッカー

桑田次郎漫画の周辺 ……171 なつ漫太郎

■ COMPOSITION

〈連載マンガ〉マグノリア ③ ……182 おさ・たけし

ESSAY REVIEW

ピカピカヒルに進路を取れ！ ……140 吉川真美子

風にふかれて児童文化論 ……88 川勝泰介

日々是まんが ……70 村上知彦

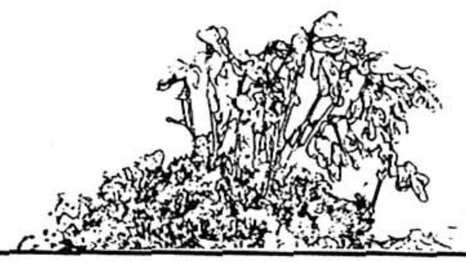
お詫びといいわけ ……139 中野晴行

■ INFORMATION

・執筆者紹介 198 ・マンガの批評と研究＋資料 197

・懐かしの漫劇倶楽部会員募集中 19 ・編集後記 199

表紙装丁・おさたけし



BIRANNZI

2004・4・15

OSAMU TAKEUCHI

⑬号

〈連載〉変容するマンガたち

「スピード太郎」描き変えのあと

竹内オサム

◆マンガ作品の推考過程

これから何回かにわたって、著名なマンガの推考のあとをたどってみることにしたい。マンガ史の名作は、同じタイトルのもと何度か描き変えがなされている場合が多い。そうした変化のあとを検討する作業を通して、マンガ家の創作意識の変化と時代相とのかかわりを浮き彫りにしてみたいと思う。

過去、さまざまなマンガが紙誌面に躍り出て、子どもたちの心を魅了した。「正チヤンの冒険」「スピード太郎」「のらくろ」などの戦前戦中のマンガ、「ジャンル大帝」「鉄腕アトム」「ゲゲゲの鬼太郎」「サイボーグ００９」など戦後の作品など、日本におけるマンガ文化の厚みは相当のものになる。こうした作品は、再度雑誌連載される時に描き変えられたり、単行本化される際に改編されたりしてきた。つまり同じ「ゲゲゲの鬼太郎」という作品でも、さまざまなバラエティがあり、どの雑誌あるいは単行本で読んだかによって、厳密に言えば読後の印象が異なるという事態が発生する。特に時代が大きく隔たる読者同士にとっては、その可能性が強い。

以下の連載では、日本における子どもマンガの代表的作品を取り上げ、その描き変えのあと、推考の変化をたどっていくことにしたい。そうした作業の過程を通じ、作り手であるマンガ家の内面的変化、また連載された時代の価値観や風俗との相関を、具体的な作品の比較を通じて考えてみたい。特に、資料的な価値にポイントをおき、本題にそった形でできるだけ詳しく紹介を試みたいと思う。

というわけで、第1回目は、戦前においてきわめてモダンな画面展開をはかった子ども向けのストーリー・マンガ、宍戸左行の「スピード太郎」をとりあげる。

◆「スピード太郎」とは

いまここに、六つの「スピード太郎」がある。――とはいってもタイトルだけ記しても、「スピード太郎」自身どういった作品であるのか、この冊子の読者には、理解しにくいかもしれない。

「スピード太郎」は、昭和五年より『読売サンデー漫画』に連載され、のち『よみうり少年新聞』に舞台を移して、昭和九年まで続いたストーリーマンガである。連載中から評判を呼び、昭和一〇年に出版された単行本は当時としては豪華な作りで子どもたちに歓迎された。田河水泡の「のらくろ」や小熊秀雄・大城のぼるの「火星探検」とともに、戦前戦中マンガの代表的作品とみなされる。

作者は、アメリカ帰りのマンガ家宍戸左行。当時アメリカで進行しつつあった機械文明の刺激が直接に反映され、また宍戸が大の映画好きでもあったことも手伝い、内容面形式面ともに、モダンな作風とストーリー展開が示された。日本のマンガ史を考える際には、無視できぬ作品だ。

簡単にストーリーを紹介しておく。この作品については、一度『子どもマンガの巨人たち』（一九九五　三一書房）で取り上げたことがある。そこに記した要約をもとに以下簡単に紹介しておくことにしよう。

物語は、車を操縦する太郎のシーンから始まる。太郎は、道であやしいトラックに接触。はずみで落ちた植木鉢のなかから金貨がこぼれ落ちる。太郎はトラックを追いかけるが、逆に男たちに捕まってしまう。彼らは世界の金貨を独占しようとするドルマニア国の手下だった。ところが太郎の勇敢な行動がドルマニア国人に好意をもたれ、客人扱いされることに。同国に旅した太郎はそこで、

ドルマニアの敵国であるクロコダイア国に立ち向かい、誘拐された姫君を救い出す。

のち話はドルマニア国の内紛にスライド。そうしたドラマ展開のもと、サル、クマをおともに従えた太郎の活躍が、ところせましと描かれている。スピード感あふれる車の疾走シーンをはじめ、垂直離陸機、ロボット、潜水艦、ロケットなど、機械文明のさまざまなアイテムが登場して、読者を飽きさせない。

タイトルにあるように「スピード」がこの作品のキーワードであることはまちがいない。昭和初期のモダニズムの香りに加え、金融恐慌（S2）、金解禁（S5）、満州事変（S6）という、不況期から戦争へという不安な時代の空気もダイレクトに吸い込んでいる、それが「スピード太郎」という作品だった。大正の初めからまる九年アメリカで暮らし、帰国後政治風俗マンガ家として活躍した宍戸の視点がそこにある。

ちなみに、第一書房版（S10）の「あとがき」の文章を紹介してみよう。珍しい資料であると思うので、少し長くなるが引いておく。

（前略）　新聞のコドモ漫画にはスピードが必要です。そして夢を満載し、科学を延長した理外の世界に少年少女を連れ出すのです。ところで筆者は日常新聞紙の中に呼吸する漫画家、幸か不幸か大人の世界をゆすぶるほどの事象、たとへば金解禁、金の偏在、満州事変といつたものはいつの間にか漫画の王国にまで反射して太郎サンは一層多忙に馳け廻ることになる。そして筆者自身がこんなに手をひろげてしまつて、夢の世界に筋が通り過ぎやしないかと心配したほどに、事件が進展して複雑になった。それは高度の批判を要する事件であり、単純に善悪正邪の概念をもつては律し得ぬ行動が頻発してくる。然し安心なことに、太郎サンはそんなことに何等煩らわされることもなく、たゞいつも明朗に果敢に敏捷に席温まる暇もなき忙しさに跳躍の快感をむさぼるのみ。太郎サンは憂鬱や感傷をあまり好かぬ少年です。（後略）

宍戸はもともと大人向けのマンガ家だった。その彼が意識していたのは、やはり昭和初期の世界

情勢であった。単なる桃太郎を模したスーパーヒーローものに終わらず、ややもすると話が複雑化する、子どもマンガらしからぬこの作品の理由は、そうしたところにある。その点が今日からみてもおもしろい。作品に示された緊張感も、いま言った時代相とダイレクトに結びついた結果であったはずだ。読者である子どもたちが、そうした時代背景を正確には知らなかったとしても。

昭和五年の新聞連載当時、作者である宍戸は四二歳。子ども向けのマンガはあくまでも余技にすぎなかった。

◆六つの「スピード太郎」

「スピード太郎」は新聞連載当時、オールカラー刷りの作品であった。その点でも注目された。ヒットしたのち第一書房から単行本化されたことはすでに述べた。また戦後も幾度か単行本化されており、また雑誌に再録されたりもしている。いまここに、六つの「スピード太郎」があると言ったのは、そうして描き継がれた作品全体を指してのことである。いま、手元にあるものを、掲載誌、出版社、および刊行年等の書誌を羅列してみよう。

タイトルはすべて「スピード太郎」なので、番号でその描き変えのあとを示しておく。

①『読売サンデー漫画』
　昭和五年一二月七日～六年五月一〇日
　『よみうり少年新聞』
　昭和六年五月一七日～昭和九年二月一一日
②単行本　第一書房
　昭和一〇年一〇月一日
③単行本　講談社
　前編　昭和二四年七月三一日
　後編　昭和二五年九月三〇日
④単行本　明快社
　第一集　昭和三一年五月三〇日
　（第二集以下の刊行は不明）
⑤『月刊のらくろ』
　昭和四〇年一〇月
⑥単行本（復刻版）
　三一書房　昭和六三年五月三一日

少し説明を加えておこう。①は最初の執筆。いま言ったようにオールカラーの当時としては破格

の新聞連載だった。②はその連載終了後、第一書房の社長に請われて単行本化が実現したもの。これもオールカラーの豪華本である。①と比較すると、毎回初めのコマに記されるタイトル部分を削る等の修正はあるものの、連載時の作品がそのまま収録されている。③は戦後のまったく新しい描き直し。こっちは数ページがカラーであるもののほとんどは一色刷りの出版だ。また④も、②③と異なり新しく描き起こされた作品、これも一部が二色だが一色刷りが基本になっている。

さらに⑤はリバイバル企画にあわせたもので、④の第1集のはじめ15ページ分をモノクロで再録している。

つづいて⑥は②の復刻版。単行本から再録したのではなく、原稿がご遺族のもとに保存されていたので、色鮮やかに復刻されており、きわめて美しい。新聞連載のものをどう修正したのか、その跡がはっきりとわかるほどのプリントとなっている。

◆3種類の「スピード太郎」

以上のように、六つの「スピード太郎」が存在するわけだが、再録等があるので実質的にはその変化は、①③④という推移をたどっていることになる。3つのバージョンがが存在するというわけだ。①『読売サンデー漫画』（S5）の新聞連載、③講談社の単行本（S24、25）、④明快社の単行本（S31）という変化である。

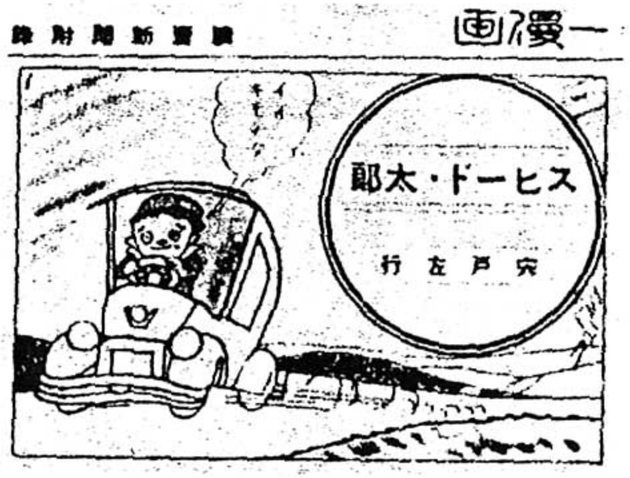


図1 「スピード太郎」『読売サンデー漫画』1930・12・7

以下では、そうした実質3種の「スピード太郎」について、描き変えの変化のあとをたどってみたい。本論で検証したいことがらは、3種類の「スピード太郎」の推考、描き直

しのあとに、作者のどのような物語づくりの意識が反映しているのか、それがまた時代の流れとどうリンクしているのかという問題である。

補足しておくと、①の新聞連載と②の第一書房版単行本（および、⑥の三一書房版復刻本）は、タイトル部分の修正以外違いがない。そこで、①の代わりに⑥の複刻版を、比較対象の資料としてここでは用いたい（参考のため、異動のある新聞連載①の第1回のタイトル部分、および1コマめを、◆図1にあげておいた）。

また、本来なら物語の全編を比較して、その推移のあとを記すべきなのだが、なにせその作業は膨大なものになる。全体の比較は、またいずれ稿をあらためて記すとして、ここではその最初の部分のみを取り上げたい。「主人公の太郎が車からこぼれ落ちた金貨を発見、落とした車を追跡ののち、金貨集めに奔走するドルマニア国の手先に捕獲される」までを分析してみることにする。物語にとって出だしは重要な意味をもつ。作者としては苦労するところだろう。この作品も例外ではない。特に戦後の酒井七馬と手塚治虫の合作になる『新宝島』（S22 育英出版）と同じく、スポーツカーの疾走という出だしは注目に値する。アメリカから帰国して日本の車が左側通行なので驚きそれをペンネームにしたという、作者の機械文明へのイメージがあざやかにデザインされているはずなのだ。

◆新聞連載版「スピード太郎」

では、簡単に3種類の「スピード太郎」の物理的な概要をまず記しておくとしよう。そのコマ数、ページ数等は以下のとおりである。（①の新聞連載は、⑥の複刻版を手がかりに考えていく。）

⑥三一書房版（1ページに平均8コマ割り）
内容　全　一一三ページ、九一〇コマ
③講談社版（1ページに平均6コマ割り）
内容　（前篇）九九ページ、六〇〇コマ
（後編）九八ページ、四八六コマ
計　一九七ページ、一〇八六コマ
④明快社版（1ページに平均8コマ割り）
内容　1巻　九六ページ、六七七コマ

④の1巻のラストは、ドルマニア国で拍車が謀

図2 「スピード太郎」 三一書房刊 1988 p1

図3 「スピード太郎」 講談社刊 前編 1949 p2〜3

反を起こそうとするところで終わっている。⑥では四八ページ、③では前編の八九ページまでがその部分に該当する。⑥四八 ↓ ③八九 ↓ ④九六とページ数が増えており、④が平均8コマ構成であることも考慮すると、描き換えごとに長編化していることが見てとれる。とりわけ戦後にはその傾向が強い。

さて、そのうちの連載最初の部分、「主人公の太郎が車からこぼれ落ちた金貨を発見、落とした車を追跡ののち、金貨集めに奔走するドルマニア国の手先に捕獲される」までのページ数とコマ構成だけをとりあげると、以下のようになる。⑥三一書房版、③講談社版、④明快社版それぞれは番号が混乱しやすいので、あらためてA、B、Cと記号をふって呼び変えておこう。

〈出だしの部分〉

A　三一書房版（⑥）　一ページ、八コマ
B　講談社版（③）　二ページ半、一四コマ
　　（タイトルマークを除いてカウント）
C　明快社版（④）　三ページ半、二六コマ

ここでも長編化の傾向がはっきりする。参考に各資料の該当部分を再録しておいたので見てほしい。

A（昭和五年からの新聞連載に相当　◆図2）では、八コマめで捕らわれの身になるまでが描写。一コマずつたどってみると、最初のコマがタイトル表示も兼ね、スピード太郎による車の疾走シーンから始まる。丘の向こうから手前に迫りくる奥行きある構図であることに注意。当時のマンガとしては、きわめて立体感を感じさせるコマ構成となっているのだ。2コマめでドルマニア国の車と接触、男たちの車の進行方向が、太郎の車とは反対方向となっていて、画面処理のうまさを感じさせる。3コマめで太郎は植木鉢のなかの金貨を発見。4コマめでは、男たちの車を追いかけ行き止まり。5コマめで同じ方向に森を分け入る。6コマめ「フシギナ家」を発見し、7コマめで捕らえられる。8コマめは縄をまかれ、金貨集めの理由を告げられるという筋運びだ。

以上にみた八つのコマはよくできている。奥行きのある立体的な画面、車の進行方向の描き分けへの配慮、各コマで変化のついた人物たちの身ぶり表現など。それらが、勢いのある筆致で描写されているのだ。内容の点においてもそうで、車というスピード感あふれる機械を出だしに使用、飛び散った金貨に謎を含ませ、おわりの8コマめにその理由を示して、今後沸き起こる事件を期待させる。

新聞連載では、このページは第1回目にあたる。読者の興味を次回につなげる効果としては、十分にその役割を果たしていると言えるだろう。同時に、毎回の連載ごとに読者に期待をもたせるという、新聞連載の性格が、こうした構成によく示されている。

◆講談社単行本「スピード太郎」

次にB（昭和二四年の講談社版単行本　◆図3）をみてみよう。図には、はじめの二ページ分をあげてみた。

Aでは一ページ八コマの内容が、Bでは二ページ半にわたり一四コマに展開されている（タイトルマークを除いてカウント）。八コマが一四コマになったのは、結論から先に言うと、描写が詳細になったためではなく、別の展開要素があいだに

付け加えられたためだ。

まず、はじめには「金貨の巻」というタイトル。鳥が足でつかんだ金貨から、スピード太郎が車を走らせ、二コマめにつづく出だしになっている。これは、Aよりもより立体的で気のきいた表現であるように受け取れる。2コマめの構図は同じ。3コマめも類似している。4コマめは、追跡したが道がとぎれ立ち往生する太郎の車。気をつけてほしいのは、Aよりもロングの視点をとりつつ、車の方向が逆向きになっている点である。さらに5コマでは「おや　こえがする」と左方面に聞き耳を立てる太郎の絵。

6コマ以下が挿入された新たなシーンとなる。6コマから11コマめまでの計六コマが、元のA（◆図2）の5と6のコマの間に差し込まれたものと判断できる。この戦後の単行本Bには、さまざまな細部が描き加えが行われている。いま示した六コマも、そうした描き加えのひとつなのだ。

ちなみにB講談社版の「あとがき」に宍戸は次のように記している。

（前略）　スピード太郎くんは、名のとおりに、とてもはやい、考えることも、動くこともはやい。ひとつのところに足ぶみしていない。足ぶみしようとしても、つぎつぎに、かわったおもしろいできごとがおこるので、またスピードの連続です。そして、どうしていかこまりきったときに、くまくんと、小ざるくんがとび出して、助けてくれます。太郎くんひとりの力では、どうにもならないが、くまくん、小ざるくんのおてつだいで、むずかしいことも、たやすく実行できるので、太郎くんは、「世の中のちえと力のある人でも、ただひとりではよわいが、おおぜいの力を合わせると、倍も二倍もの効果をあげることができるんだね。」と、いっています。

それにしても、太郎くんのスピードは、心も体も強いからです。くまくんと小ざるくんとが、いっています。

「太郎くんは、ひきょうなことや、まがったことがだいきらい、それが気にいったから、おてつだいしたのさ。」……と。

ここではひたすら太郎の知恵と勇気という、ヒ

ーローぶりが強調されているのだ。

講談社版（昭和二四年）の刊行時、宍戸は六〇歳。当然のことながら、油の乗り切った時期はすでに過ぎていた。アメリカに留学し、近代的な風物を肌で吸収した映画が大好きだった宍戸の記憶は、昭和五年の新聞連載当時は、いまだホットなものとしてその筆致に示されていた。それから二〇年、新たな描写をプラスしようとしたものの、斬新な手法が色あせてしまったとしても不思議はないだろう。

宍戸は、「老眼のスピード太郎」（宍戸左行 週刊朝日 S24・7・10）のなかで、書き換え版Bの作品について、つぎのようにふれている。

（略）某社から長編漫画スピード太郎を複刻するために一方ならぬ手数がかかつた。この機会に帝都転入を実現しようと思いたつた。スピード太郎は読売新聞の毎週連続三色刷漫画として三ケ年を費したもの。この他に「特急三郎」はレコード三枚に数ページを吹込んで発売されたが、何れもコドモのために、夢を失わぬ程度に実写と躍動との実現に留意している。前者は今みると現代のことを描いているみたいだが、遠慮する箇所を改作する序に全部描き直しをやつた。（略）

「前者は今みると現代のことを描いているみたいだ」というのは、太平洋戦争をイメージしてのことだろう。また、「遠慮する箇所を改作する序に全部描き直しをやつた」と言うが、それが成功したかというとクエッションマークがつく。その理由は、いま述べたとおりである。

◆人物描写と言葉の役割

以上、ABふたつの「スピード太郎」を比較してみた。

Bには、Aをもとにした描き加えのあることがわかった。この点をもう少しちがった角度から見てみることにしよう。両者の画面を、いま人物の進行方向性という要素から分析してみる。◆図4を見てほしい。

主人公の進行方向、あるいは体の向きを黒い矢印で示しておいた（不審な男たちの方向は白抜きの矢印で記した）。Aでは矢印は交互に変わる。

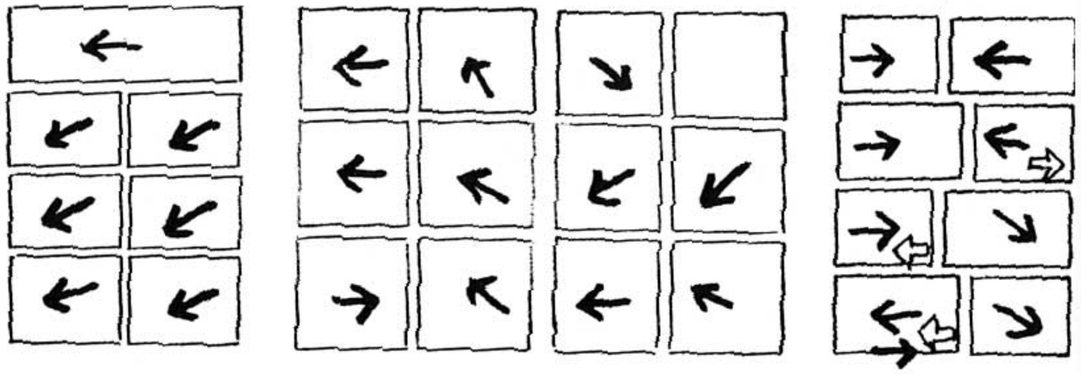


図4 C 明快社版（S31）　B 講談社版（S24）　A 新聞連載版（S5）

Bではおおむね左につき進む。ここからわかるのは、戦前のAは、人物の進行方向が太郎と男たちの対立を軸にして組み立てられているという点だ。それに対し、戦後のBでは、コマの進行方向（左）が優位にたってコマ構成が図られている。そうした対比が理解できるだろう。Bでは太郎はコマの進行方向にあわせてページを超えて進みつづける。あとで触れるCになると、終始左方向が意識されていることがわかる。

おそらく掲載誌紙の性格が、ここには深く関わっているのだと思う。Aは新聞連載のものを直接に反映している。つまり新聞紙上での画面意識が働いたにちがいない。次のページとの関連は、単行本ほど強く意識されていない。ところが戦後のBは、直接単行本に描き下ろされたので、次のページへの連続性が強く意識され、こうした方向性が選びとられたようだ。

こう見てくると、戦後のBの方が今日的だという印象を受けるかもしれない。しかし、2ページめ＝挿入された6～11のコマを見ていただくとわかるが、視点は真横に固定していて、きわめて平板な視点が続く。構図に工夫が乏しいのだ。逆にAを下敷きにした1～5コマの方がいきいきとしている。

また言葉の用い方にも注意してみたい。

AとBをざっと見渡してみればわかることだが、Bに比べAは吹き出し内の言葉の量が多い。割れた植木鉢から金貨を発見するシーン（3コマめ）、

および車がいきどまりになるシーン（4コマめ）、それぞれのセリフを書き写して比べてみよう。

・3コマめ

A　オヤッ　オッコトシテイッタ　ウエ木バチ
　ノソコカラ　金貨ガデタ　早クオヒカケテ
　トドケテ　ヤロー

B　あっ　はちのそこから　きんかがでた　と
　どけて　やろう

・4コマめ

A　ハテナ　道ガ　ユキトマリデ　ナクナッタ
　ガ　トラックハ　ドコヘ　イッタロー

B　みちが　なくなった

一目瞭然だが、セリフが少なくなっている。全編この調子だ。Bはわずかな言葉によってストーリー展開をはかっていく。要するに戦前のA「スピード太郎」は、絵の表現内容以上に、言葉によって物語展開をはかっていたわけで、その分言葉と絵のバランスが悪い。絵ばなしなどの言葉優位の物語から、いまだ自由でなかった経緯がそこに示されている。

では、Bが今日のマンガのスタイルに近いかというと、また論理を逆立ちさせるにようだが、そうすっきりと断言できない。ことは複雑である。日本語表記の縦書きのなごりが、Bにもそのまま受け継がれ、コマは上から下へと進んでいく。そうした古めかしさを受け継いでいるのも事実。それ以上に注目したいのは、セリフが指し示す内容の方である。言葉の使用でも、戦前の特質を色濃く残しているのだ。

Bの左ページ6コマめから11コマめまでのセリフを、いま抜き出してみる。

6　あれっ　ボタンを　おしたら
7　にょきにょきと　きがのびた
8　おやおや　こんどは　じめんから　おうちが
　せりあがったぞ
9　うちのなかで　ボタンを　おして
10　おうちは　もとのように　ちかへ　かくれた
11　ひとつ　ためして　みよう、

終始言葉が絵の説明になっていることに気づく

だろう。木が伸び、家がせりあがりまた地下に隠れる、そうした目の前のからくり屋敷の変化を再度確認させるように、太郎の言葉が添えられているのだ。戦前のマンガにはこうした例が多い。いまだ絵と言葉のコンビネーションがはかられていない時代の名のこりなのである。

いまみた言葉と絵のシンクロ現象については、「手塚治虫―「新宝島」・絵と言葉はなぜズレるのか」（『子どもマンガの巨人たち』所収　一九九五　三一書房）や「言葉の呪縛―コマにおける絵と言葉の関わり―」（『ビランジ』5号掲載　一九九九）で詳しく論じているので、参考にされたい。

このように、Bの作品は戦前のAをもとにした改作であるものの、視点の変化の平板さ、および絵と言葉をひとコマ内で同調させてしまう表現において、むしろAよりも後退した印象を与えてしまう。

◆明快社版単行本とその後

これまで戦前版のAと敗戦直後のBについて見てきた。では、最後のC、昭和三一年に明快社から出された単行本ではどうなのか。その出だしは『月刊のらくろ』（昭和四〇年一〇月）にも再録されており、それなりに作者にもこだわりがあった改編であったはずだ。昭和三一年当時作者は六七歳。

結論から言うと、Cはさらにその表現性においては後退していると言わざるをえない。◆図5でみたように、進行方向はつねに左方向に一定だし、大小の描きわけというクローズアップやロングの

図5　「スピード太郎」　明快社版　1956　p1

表現変化にも乏しい。背景や車など道具立ての細部も簡潔にすぎる。車も変わっている。もともと太郎は乗用車に乗って疾走していたはずだが、ここでは一人乗りのスクーターに様がわりしている。言葉も、ひとコマ内で絵と対応する例が多々みられる。

出だしの部分は『月刊のらくろ』に再録された。その当該号の「編集後記」には、「宍戸先生は現在も大変にお元気です。尚本号のリバイバルの頁はすべて宍戸先生が保管なさっていられた昔の原稿をそのまま拝借いたしました。」（128ページ）と記されている。戦前の第一書房版の原稿も、作者の手元にあったはず。なのに複刻に際してなぜ戦後のものを、それも昭和三一年刊のものを持ち出したのか、その点が腑に落ちない。第一書房版の方は新聞連載のものがそのまま記録されており、その政治意識が当時の子どもマンガにふさわしくないと判断されたのかもしれない。ここらは謎だ。

以上、3種の「スピード太郎」を比較してみた。A（昭和五年の新聞連載　分析資料には昭和一〇年の第一書房版単行本を使用）、B（昭和二四年の講談社版単行本）、C（明快社版単行本　昭和三一年）の三つの異本をである。その変化は比喩的にいえば、「スピード太郎」という作品が、そのタイトルにもかかわらずスピードを減じていくプロセスでもあった。当時のモダニズムは時代を越えて生き延びることができなかった。これをマンガの歴史に重ね合わせると、またちがった風景が見えてくる。

Aが連載された昭和五年は、日本の子ども向けのマンガが、今後隆盛をみようとする勃興期。「スピード太郎」そのものがそうしたマンガ文化の流行の一方の火付け役ともなったわけで、技法的にも絵物語あり、コママンガありといった模索期と重なりあっている。吹き出しを用いたマンガの流行は、田河水泡の「のらくろ」の影響が大きいが、「スピード太郎」も新時代のマンガ形式の普及に、同時に大きな役割を果たした。アメリカ帰りの映画好きの宍戸がその役目を担ったのは、ゆえあることと言えよう。

やがて新聞、単行本、雑誌を通じて、昭和前期には子どもマンガがメディアに広く浸透していく。

そしてそうしたマンガ文化の蓄積が、戦後の手塚治虫を出現させる。手塚が酒井七馬と組んだ『新宝島』を出版するのが昭和二二年。手塚は昭和二四年には、大作「メトロポリス」をものにしている。おなじく昭和二四に出た講談社版の「スピード太郎」Bは、「正チャンの冒険」「ペンギン太郎」「カリ公の冒険」などと合わせてだされた講談社による戦前マンガの焼き直し出版のひとつだった。出版企画も戦前とのつながりが濃厚であったことになる。

さらにCの昭和三一年になると、手塚流ストーリーマンガが大流行していた時期。当然ながら、宍戸も子どもマンガの目まぐるしい動きを目にしてたにちがいない。しかし、すでに子どもマンガから距離をおいていた身、流行のマンガは遠い現実でしかなかったのだろう。

戦前から戦後へ。「スピード太郎」の描き変えとともに、時代は大きく変化していく。子どもマンガはその流行的性格を、技法面にも波及させていく。宍戸左行の「スピード太郎」がそのスピードを減じてしまうように見えるのは、そのような目まぐるしいマンガ界の変化に照射されるためでもある。「スピード太郎」はやはり昭和初期という時代のなかでこそ、その輝きを放っていたと言わねばならない。

ここでは、冒頭のシーンしか扱うことをしなかった。物語全体に言い及べば、また別の景観が描写できるかもしれない。全体の比較については、また別の機会にゆずることにしたいと思う。

まったビデオをデジタル化したいという狙いではじめたもの。映像の劣化を心配してと、録画したものを授業等で見せるときに、コマーシャルをカットできないものかと思案の末の決断でした。キャプチャーを買いパソコンにセットする、ドライバーを組み込みソフトをインストールする、ここまではよかったのですが、実際に作業をしてみると大変。

◆まず映像の形式がわからない。やたらと種類が多く、どの形式で保存したものかと戸惑う。そのまま保存すれば大容量。これは圧縮して保存すべきだと、映像の圧縮作業に取り組むのですが、これがなかなかやっかいでした。あれこれ迷い、やっとまがりなりにも作業の手順を覚えて一段落。ほっと一息。

◆気休めにと、昔撮った子どもたちのビデオを手にする、これが命とりでした。幼い頃の子どもというのはかわいい。自分の子どもであればなおさらのこと。デジタルに取り込むのを忘れ、ついつい当時のビデオを見続けるはめになりました。この時はこうだった、あのときはこんなこともあったと、すでに画面を前にした男は、大昔を懐かしむ老人の気分です。

◆自分は何をしているんだ！　ふと気づくいた時はすでに遅し。『ビランジ』の編集締め切りも迫り、あたふたとした気分が倍増です。ビデオの方はすぐに脇にのけて、ふたたび編集作業に集中し、やっと今このように編集後記を書いているという次第です。疲れました、ホントに…。

◆てなわけで、やっと13号、ここまで来ました。この調子ですと、20号は何とか越えられるでしょう、おそらく。毎号掲載される文章の児童文化史における資料的価値は充分、『ビランジ』は後に繰り返し参照される冊子になるはずです。今後ともどうかよろしく。

◆『ビランジ』は、無料の冊子です。どなたにもお送りします。ただし、郵送料として、一冊に二四〇円分の切手が必要です。バックナンバーは、本誌特集「マンガの批評研究誌もくじ一覧」に記されています。号数下の＊印のものが在庫のあるものです。それで確認してお申し込み下さい。
また、『ビランジ』では原稿を募集しています。４００字で四〇枚以内、ページ数で20枚以内。版下作成が原則です。締め切りは、04年の7月末。採否は竹内の判断によります。その点ご了解下さい。
では、また14号でお会いしましょう。

ビランジ　13号
発行者＝竹内オサム（〒　　）
発行年月日＝２００４年４月12日
印刷＝木村桂文社